

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

北方民族文化研究における観光人類学的視点(1): 江戸～大正期におけるアイヌの場合

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/5618 |

北方民族文化研究における観光人類学的視点 (1)

— 江戸～大正期におけるアイヌの場合 —

齋 藤 玲 子*

The Study of Tourist Arts in Ethnographic Records (1):
In Reference to the Ainu from the Edo era to the Taisho era

Reiko SAITO

The aim of this paper is to research the origin of tourist arts in the Ainu by quoting passages from the ethnographic records in context to historical backgrounds, and also to retrace the transition of their native culture by studying the influences of contact with other cultures.

Material culture of Ainu has been altered through cultural contact. Crafts account for large percent of the museum's collection. Therefore the trend of these crafts reflect the policy and the economy of each period, and also of Japanese interests in Ainu people.

In the Edo era (1603-1867), Japanese explorers and officers were in close contact with Ainu, and were attracted to aesthetic Ainu arts. At the first stage of Japanese and Ainu relationship, the offerings from native people were of natural products; dry fish, animal skin, feather and so on. Since the Japanese government (Edo-Bakufu) prohibited Ainu people to trade freely, they began to make many crafts in order to obtain Japanese goods. For example, wooden trays, ladles, towel hangers, and garments made from inner bark fiber of elm in Hokkaido, baskets in Kuril Islands, and garments made from nettle fiber in Sakhalin. These crafts which were used as trading goods and offerings had the aspects of souvenirs.

* 北海道立北方民族博物館学芸員

キーワード アイヌ、工芸、観光芸術、交易、献上品、木彫、民族誌の記録
Key Words Ainu, Crafts, Tourist Arts, Trade, Offerings, Wood carving, Ethnographic records

In the Meiji era (1868-1912), the government's policy prohibited traditional Ainu customs. However their crafts were treated exceptionally, and instead they were demanded to make them for exhibitional purposes.

In the Taisho era (1912-1926), wooden bears began to be carved after the model of some Switzerland souvenirs. Asahikawa City not only bought their crafts and helped sell them, but also taught Ainu people excellent technics and designs. These were beginning signs of "tourism" that can be related to the present.

This study suggests the differences between traditional customs that survived and vanished, and gives us a key to the question: What is a tradition? We can also see the Japanese view of Ainu culture through this.

はじめに

昨年1993年は国際先住民年だった。国内でも民族資料を多く収蔵する博物館は、記念事業として特別展などを行ったが、収集や研究の対象としてきた経緯からもそれらの主たる内容はアイヌ民族資料の展示であり、テーマの中心は「工芸」であった。

なぜこれらの展示で工芸が取り上げられたかは、「工芸は自然に対する信仰心から生み出され、そこには民族の世界観がある」〔東京国立博物館 1993〕や、「文様は民族の心を形にあらわしたもの」〔大塚 1993〕という趣旨に示されている。そして、北海道開拓記念館では「民族文化を継承する新しい活動」として「民族芸術」を紹介している。当館でも北方諸民族と現代の民族芸術の関わりをテーマとした。それぞれの博物館の展示図録等の前書きによれば、展示をとおしてこれらを理解してもらうことが、すなわち(アイヌ)民族文化の理解と振興につながるとともに、ひいては異なる民族が対等で平和に共存する社会への第一歩になれば…という趣旨が示されている。筆者も、このような趣旨について賛同している。しかし一つには、博物館の収蔵資料のなかで、衣類や儀礼用具などを含めた文様の施された「工芸」といえるものが、かなり大きなウエイトを占めており、展示を構成しやすいという理由もあったのではあるまいか。

国立民族学博物館が掲げるように、「(ふつうの)一家族の日常生活に必要な諸道具類のワン・セット」すべてを収集すること〔国立民族学博物館 1985 : pp.123-124〕は、理想でありながら難しいことである。収集された資料は、収集者が「美しい」と感じたり、その民族・文化に「特徴的だ」と考えたものであり、何らかのバイアスがかかっていると言ってよいだろう。また、通常、例えば収集者(民族学者)が先住民から「物」を入手した時点で、それは交易品であったり、贈与品となったりするわけだから、そこには贈り手

である先住民側の意思も反映されていると考えられる。

欧米人、あるいは北海道における和人との接触によって、先住民族の物質文化が大きく変容してきたことは、明らかである。しかし、消滅していくものと継承されて残ってきたもののあいだには、それぞれどんな事由があったのか。そして、移住者や研究者が先住民族の文化を見る目とはどんなものであったか。筆者は、その答えに手掛かりを与えてくれるのが観光人類学的視点ではないかと考えており、これらの観点からアイヌにおける工芸の歴史をたどってみたい。

観光人類学と物質文化研究

観光人類学は、日本ではまだ比較的新しい分野であり、その定義なども確立しているとは言いがたい。石森修三が「これまで、観光客のために演じられる芸能や観光客のために作られる工芸は、『ホンモノの芸術』ではないとみなされ、学術研究の対象から除外されてきた。民族学者は『ホンモノの民族文化』を研究すべきであり、観光客向けの『ニセモノの民族文化』は研究に値しないとみなしがちであった。そのため、正統的な民族学者は観光地を避けたり、観光客がかかわるものを意図的に排除してきた。…中略…『観光人類学』という新しい学問は観光客向けの芸能や工芸を『観光芸術（ツーリスト・アーツ）』という概念でとらえなおし、研究を行っている。」〔石森 1992〕と述べているように、観光人類学の視点をとおして「ホンモノ」「ニセモノ」、あるいは「伝統」とは何かを問い直すことは、民族文化の本質を再考することでもあろう。

観光芸術の定義について、石森は「観光芸術とは、観光客向けに商品化された芸術の総称」であり、民族芸術をベースにしなが、それにさまざまな創意と工夫を加えて観光客向けに作り出された音楽、芸能、美術、工芸のことだとしている。先に民族文化における「工芸」の意味について触れたが、民族芸術学もまた古くから注目されていながら、学問としてはまだ新しく、「観光芸術」もまたこれからの課題である。

観光客向けの「芸術の商品化」の過程はどの民族でも類似しているといい、第一段階は生活に用いているものをそのまま観光客などのゲストに売ったり公開したりするもので、次に観光客のために特別に芸術が商品化される場合があり、この段階で「観光芸術」が成立するという〔石森 1991〕。第一段階の「ゲスト」には、どのような立場の者が考えられるであろうか。交易や移住を目的とした和人の来道が、観光でないことは確かである。しかし「みやげ」が外出先の土地の産物をもとめて持ち帰り、家族や餞別をくれた者などに配る品とすれば、異民族間の交易品あるいは献上品としての工芸品もみやげの要素を多分に含んでいる。「観光」とは「みやげ」とは何か、その舞台設定や状況のなかで、幅広く考えてみると、自分のために作るものから他人のためのものへとかわる交易は、その萌芽ということができないだろうか。むろんこの場合、作る側と受けとるまたは買う側の意

識とその状況が重要なカギとなる事はいうまでもない。

アイヌ文化研究と観光

近年は先進国においても先住少数民族が国際観光のターゲットになる例がしばしば見られ、北方の諸民族もその例に漏れない。筆者は以前、イヌイトの観光芸術の例をあげながら、物質文化の変容と欧米人との接触の関わりを紹介し、北方諸民族における現代の民族芸術研究の課題について提起した〔齋藤 1993〕。国内でも北海道のアイヌの人びととその文化は、長い間、観光とは切り離せない存在となってきた。

ところが、「観光」という視点からのアイヌ文化研究は少なく、河野本道が中心となって作成した観光地年表が知られている〔成田・花崎 1985〕が、今後も市町村史などから各地における近代以降の観光の推移を追う必要がある。

日本人と旅の関係についてふりかえてみると、江戸時代には世界にさきがけて、遊びとしての旅が成立していた。この頃には、社寺参詣をする人びとが増え、大きな門前町にはみやげ物屋が発達していたという。また、今でいうガイドブックの役割を果たす旅行案内書が相次いで出版されるようになったのも江戸期である〔石森 1989〕。このような本州以南における時代背景を考えると、北海道の産物やアイヌの生活を紹介した和人の書物などはさながらガイドブックのようであり、「蝦夷地」は誰しもが行ける場所ではなかったが、この地の「みやげ」に対する需要の高まりを読みとることができる。

そこで、以前から課題としていたアイヌの工芸品の変遷に和人がどのように関わってきたか、歴史的に辿ろうという試みがこの小論の趣旨である。今回は、大正時代までの文献から関係する記述を拾い出し、検討していきたい。

江戸時代の土産

元来アイヌは自分たちが使うために「もの」を作ってきたが、和人のため、ことに贈与・交換用あるいは売り物としての工芸品を製作したことが明らかな記述は、18世紀以後に現れる。しかも、高倉新一郎のいう前幕府直轄時代(1807~1821年)以降、多くの幕吏が訪れたり、商人などが比較的自由に往来できるようになり、記録文が多く著され、そういった人びとによって「蝦夷みやげ」としてのアイヌの工芸品需要が高まったことは容易に想定できる。

近世前期の交易品には、海産物、動物の毛皮や鷲羽のほか、大陸産の錦やガラス玉が挙げられているが、アイヌ自製の工芸品は含まれていない(表1)。海保嶺夫によれば、中世までは「交易の地」であった蝦夷地は、幕藩権力によって十七世紀末時点を以てその活動を制限され、十八世紀後半には「商品生産の場」へとその経済状況が変化した。結果、アイヌは以前交易で入手していた和産物を場所での労賃のかたちで入手せざるを得なくな

表1 近世前期交易品一覧表

| 時代 | アイヌ側商品 (アイヌ→和人) | 出典 |
|---------------|--|----|
| 1611 (慶長16) 年 | 魚類、動物の皮など | 1 |
| 1613 (慶長18) 年 | (銀)、(砂金)、鮭、干魚 | 2 |
| 1618 (元和4) 年 | 乾燥した鮭、鯧、 ^{ラッコ} 獵虎皮、ドンキ*1 | 3 |
| 1620 (元和6) 年 | 上質の絹布、獵虎皮 | 4 |
| 1621 (元和7) 年 | 乾鮭、鯧魚、白鳥、鶴(生、干)、鷹、鯨、トド皮、獵虎皮 | 5 |
| 1717 (享保2) 年 | 干鮭、干鯧、干鱈、串鮑、串海鼠、昆布、オットセイ、魚油、干鮫、塩引鮭 | 6 |
| 1739 (元文4) 年 | 鷹、鷲、粕尾*2、ウスビウ*2、鶴、エブリコ*3、熊皮、熊肝、鯧、昆布、鮭、鹿皮、ネップ皮*4、トド皮、串貝、煎海鼠、干鱈、鯨、鮫油、椎茸、白干鮑、獵虎皮、オットセイ、蝦夷錦、虫巢*5 | 7 |

[海保 1985] より引用

出典 1 『ビスカイノ金銀島探検報告』 2 『ジョンサーリスの報告書』 (仮題)
 3 『アンジェリス第一蝦夷報告』 4 『カルワーリュの旅行記』
 5 『アンジェリス第二蝦夷報告』 6 『松前蝦夷記』 7 『北海隨筆』

原註 1611年、1613年の史料は伝聞によるもの。

1717年、1739年のアイヌ側商品中には、単に蝦夷地の場所の産物をも含む。

筆者注 * 1 …大陸産の衣類、蝦夷錦 * 2 …いずれも矢羽用 * 3 …キノコの一つ
 * 4 …オットセイの皮 * 5 …装飾用のガラス玉

り、このような歴史的状況の下で工芸品が生産されたとしている [海保 1985]。

江戸時代末期には、請負人及び役所に雇われていない者や冬季間の「自分稼」の一つとして、手の利く者は細工物に専念し、それを内地商品に代えて家計を助けたということが明らかである [網走市史上巻: pp.739-741]。表2は、宗谷場所におけるアイヌと和人との交易の交換比率を示したものである。数字は、基準となっている8升入りの米1俵あたりの、それぞれの産物の数量である(寛政のほうは「右の外」として魚油で交易直段を記した、大陸産のものを含む高級品とでもいうべき物が付け加えられている)。なお寛政四(1792)年の出典は『夷諺俗話』の「宗谷交易定直段」、安政のほうは「安政二(1855)年宗谷場所御引渡目録」 [網走市史] から引用したものである。ここに挙げられているものが交易品すべてとは言えないし、地方差もあったことと思われるが、二つを比較して、海産物の直段に変わりはないものの、安政2年にはアイヌの工芸品が品目としてかなりを占めていることが明らかである。

この二つの時代の間にあたる文政元(1818)年の新冠場所からの献上品について、高倉は次の例を示している。「蝦夷の献上品は主として其場所の土産若くは蝦夷人が冬中手透を見て作つて置いた細工物であつた。」として、「松前へ差上物 夷人細工手拭掛 拾掛、間切鞘 拾五本、匙 貳拾本、筆軸 貳拾本、糸巻 貳拾枚、煎海鼠 貳百」「箱館へ差上物 夷人細工手拭掛 五掛、間切鞘 拾本、匙 拾本、筆軸 拾本、糸巻 拾枚、

表2 宗谷場所交易定直段

| 品名 | 寛政4(1792)年 | 安政2(1855)年 | 備考 |
|------------------------|-----------------|--------------------|------------------------------------|
| 鯨 | 6束(1,200) | 6束 | 安政の方は「外割鯨」とある |
| 煎海鼠 <small>いりこ</small> | 500 | 500 | |
| 鮭 | 5束(100) | 5束 | |
| 鱒 | 15~16束(300~320) | — | |
| 干鱈 | 6束(120) | — | |
| 鮭アダツ | 3樽(6斗) | — | アダツは干して細かく刻んだ物 |
| 鱒アダツ | 3樽(6斗) | — | |
| 鯨鱈 <small>かすのこ</small> | 3樽(6斗) | 4樽(8斗) | 安政の方は干物と明記 |
| 白子 | 3樽(6斗) | 4樽(8斗) | 安政の方は干物と明記 |
| 笹目 | 6樽(12斗) | — | 魚のえら |
| 椎茸 | 600 | — | |
| トド皮 | 1枚 | — | |
| 水豹皮 | 3枚 | — | |
| 薪 | — | 2間 | |
| 秣 <small>まぐさ</small> | — | 800把 | |
| 茅 | — | 800把 | |
| 反アツシ | 3枚 | 2枚 | |
| 手幅付アツシ | 2枚 | 1枚 | 安政の方は「平軸」とある |
| 簾 | 6枚 | 上で8枚、並で40枚 | 寛政はアブスケ <small>あぶすけ</small> ；葎簾とある |
| キナ | 3枚 | 2間走0.5枚(1枚で2俵)、並2枚 | 錠のこと |
| しな網 目心4寸60目 長さ4間 | — | 1把 | |
| 同小目網 目心2寸5分 | — | 2把 | |
| 同細縄 200尋 | — | 4把 | |
| 蝦夷細工手拭掛 | — | 10本 | |
| 同 筆立 | — | 4 | |
| 同 茶壺 | — | 1 | |
| 同 茶台 | — | 2 | |
| 同 杓子 | — | 10 | |
| 同 匙 | — | 40 | |
| 同 マキリ鞘 | — | 20本 | |
| 同 糸巻 | — | 40枚 | |
| 羽箆 | — | 2.7枚(1枚で3升) | |

表3 安政年間における各場所の献上品

| | |
|-----|--|
| 山越内 | 船2隻 板オシキ5枚 筆立5箇 姥百合粉1袋 干 ^{かれい} 鰈10枚 干 ^{うぐい} 鰯15本 |
| 虻田 | 木刀5本入3箱 |
| 有珠 | キナ筵2枚 帆立貝30枚 干 ^{たら} 鱈2束 |
| 室蘭 | 杓子20本 キナ筵2枚 糸巻200枚 |
| 幌別 | 手拭掛4本 糸巻20本 間 ^{まきりきや} 切鞆4本 |
| 白老 | キナ筵2枚 手拭掛20本 糸巻30枚 |
| 勇拂 | 半月盆5枚 手拭掛10本 キナ筵2枚 |
| 沙流 | 廣蓋5枚 半月盆5枚 丸盆5枚 手拭掛5本 筥2枚 大豆・小豆・稗・粟(各8升) |
| 新冠 | 杓子30本 唐太碗30枚 筆立5本 筆軸30本 間切鞆5本 |

* 村尾元長『あいぬ風俗略志』(明治25年)より引用

「土産献上物と云ふも各場所に依り種類を異にし時代に依りても多少異同なり安政年間の一斑を掲ぐれば左の如し」との前文がある。

煎海鼠 百貳拾」を挙げている〔高倉 1942 : pp.170-171〕。表3には、『あいぬ風俗略志』〔村尾1892〕から、安政年間の各場所の献上品を挙げた。これらからも献上品は、工芸品が大部分を占めており、時代が新しくなるほど、その種類も増えていることがわかる。

どのような物が作られていたかについて、もう少し詳細にみていくと、木彫品として、マキリ(小刀)の鞆、杓子、盆、糸巻きなど自らも使用する生活用具とほぼ同類のもの、菓子入、香合、水さし、筆軸、筆筒、手拭掛など初めから和人向けに製作されたものが見られる。以下にそれらの具体的な事例を示す。

平秩東作は、天明三(1783)年に著した『東遊記』のなかで「日本より刀劍の類を渡す事制禁なり。マキリ逆刃がねなき小刀を渡す。是にて彫物などしたる器物をつくるに、其細工いたりて精密なり。弓を負ひ矢を荷ふ。器皆ほり物あり。酒をいる、物をカモと云。物をよそふ杓子までみなさまへの模様あり。此方よりかたを遣しぬれば、水さし香合の類まで作りて贈るといへり。」と記している。『アイヌ史資料集第二期第六巻』として刊行された阿部正己の『アイヌ叢誌(三)』には、「彫物に巧者のこと」として、関連する記述が収められている。ある幕吏が『蝦夷みやげ』として享和元(1801)年に著したもので、「夷人愚なれども、皆木細工などは出来る也。煙草入は本邦の印籠を大きくいたしたる様にて、種々の模様を彫、…中略…煙草入・きせるさし大方自分細工の外、女夷と云共是を所持する外になし。…中略…此柄鞆共悉く彫物あり。是をマキリと云壺本十五六文位

(空字) 打の小刀也。…中略…彫物の上手ありて、脇差のさや、革なめしかわ(空字) 革の軸、香入などの類を彫しに、やはり右のマキリ壺枚にて、道具なしといへども至て綺麗なり。」とある。また、文化五(1808)年には、兒山紀成が『蝦夷日記』のなかで「(八月)廿日 阿津別にて晝けたうべ、福之見の番屋に休みて、佐留サルの役館にやどる。…中略…。こゝにをる島人木を彫て巧にもものす。人々こひもとめて家土産ツツケンにす。かうやうのもの造りなせるは、この島にて悪消アツケンとこゝに限れり。さゝやかなる刃ものたゝひとつにて、おのかのる船をさへ造れり。」と記している。

これらは和人のために作られた木彫について書かれた初期の記録であるが、質の悪い刃物でも精巧な彫物をしあげるアイヌの技術に対する賛辞とともに、サル(=沙流)とアツケン(=厚岸)の木彫りがみやげとして求められていることなど、具体的な地域やマキリの価格も挙げられている。

そして、イヌイトの彫刻の腕を見初めた欧米人が、肖像画等をセイウチの牙に刻ませたように、幕吏などの個人がアイヌに工芸品を依頼した場合、見本をつかわして希望の物を作らせていたことがわかる。時代は下るが、松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』(1858年)にはその様子や木彫に刻まれた文様などの詳細を読み取ることができる。「石狩場所サツポロなる處の小使役を勤けるモニヲマといへるは當年三十七歳、…中略…性彫を好みて常に匙、手拭懸け、小刀の鞘、膳、椀、菓子器、印籠等種々の物彫て、又短刀の鞘に唐草雷文等を彫すると衆目を驚かざることなし。又唐物等出して夫を眞似さするに、又一等の趣味ありて、其妙筆紙の及所にあらず。」という。そして、「余昨年巳年一つ彫物を頼み、彫成て年月と其名を墨もて書き、是を彫置ん事を命ずるに、やゝ暫く是を眺めて居て刀を取り彫るに、筆勢の遲緩中て春蛸秋蛭の論にあらず。一丁字を不レ辨ものにして如レ此工有事衆人驚歎せざるなし。」という記述から、彫りあがったものに日付と名前を彫り込ませていたこともわかる。

同書には、「シタエホリ」という彫工の記述もある。「…ナイホといへる處に一人の土人あり、頗る勇あり。聊か會所の令を不レ用して、我が親迄は肉食皮服の徒なるに我何ぞ敢て綿衣穀食を欲せん、肉を喰て皮を着るべきなりとて、一粒の米を喰はずして唯常に一柄の小刀を以て彫物をなし、食盡るときは海に入て漁り、その貯ある間は聊か他事なく、盆、椀、匕、柄杓、又好事の人ありて彫物を促せば筆筒、筆管、小刀の鞘等を作る。其彫の比するに物なく、實に一奇工にして…」と、アイヌとしての誇りを持ち、希なる技術を持つ人物であることが記されている。東京国立博物館の佐々木利和氏にご教示いただいたことだが、アイヌ民族博物館(白老町)に収蔵されている田中忠三郎コレクションのなかには、「北海道土人細工 會席膳 五人前」と記載された箱に入った膳があり、その膳の裏には5枚とも「エトロフ住 シタエーパレ造」と彫刻されている。武四郎のいうシタエホリの作である。(財)積古館長である田中氏が下北地方の海岸地帯から収集した資料であるのだから、大変興味深い。膳の表に彫刻されているのは、アイヌに特徴的な文様ではな

く、和製漆器などから写しとったような花などの図柄である。

さらに、木彫りに関しては、このような「名工」と呼ばれる人物の名前をいくつか拾うことができ、アイヌが皆器用に彫刻をするというのは事実であろうが、特に腕の優れた者が聞こえ、また優れた彫刻人の多い地域を挙げた記述もある。こういった人たちは依頼されて物を彫っていた(表4)。

以上のように、初期の木彫は、実用品ではあるが、かなり嗜好品的な趣の感じられるものが少なくない。当時の人びとが賛辞し、名工の名をあげているように、「珍奇なもの」というよりもむしろ「粋なもの」と受け取られていたのではないと思われる。木彫は、次にあげる女性の手による織物・籠細工とちがいで、技術以上の価値、いわゆる「芸術」と

表4 文献に現れる細工上手の人名一覧

| 年代 | 名前 | 地域(現在) | 得意とするもの等 | 引用文献 |
|-------|--------|--------|-------------------------------------|-----------------------|
| 1809 | タイコウ | 厚岸 | 上細工人。何細工にても出来 | 『東行漫筆』 |
| 〃 | ウタツチャレ | 〃 | タイコウに次ぐ。菓子入などを拵る | |
| 〃 | ヲヤクレ | 〃 | 同上 | |
| 〃 | サルルンカ | 〃 | 手拭懸け | |
| — | ニーコーウセ | 白老 | 彫刻がうまいため招かれて松前に行き、滞在2年に亘り作品を藩主に献上した | 『アイヌの足跡』 |
| 1858 | モニヲマ | 石狩サッポロ | 匙、手拭懸け、小刀の鞘、膳、椀、菓子器、印籠等 | 『近世蝦夷人物誌』 |
| 〃 | シタエホリ | 択捉島ナイホ | 盆、椀、匕、柄杓。促せば筆筒、筆管、小刀の鞘等を作る | |
| 〃 | (セシリバ) | 紋別 | 手拭懸け、糸巻き、匙 | |
| 1876 | イモンパウク | 門別町平賀 | 細工上手の者として推薦される | 『明治八、九年 開拓使公文録』 |
| 1877頃 | 杉目出目平 | 千島 | 函館で盆などを彫っていた | 『アイヌ芸術』 |
| 1913 | ハイバツテイ | サハリン | 彫刻その他の手芸 | 阿部正己収集「小樽新聞」 |
| 1919 | イカジオ | 小樽市忍路 | | 河野常吉 『アイヌ 聞取書』 |
| 〃 | 菅原利右エ門 | 小樽市塩谷 | | |
| 〃 | 無江仁助 | 余市 | | |
| — | 山下ザラセク | サハリン真岡 | 細工は何でもする | 『北方歴史叢書 千島・樺太の文化誌』 |
| — | 山下ソロク | サハリン真岡 | 細工の上手な人と伝えられる | |

してのデザイン性や精神性などが認められていたように思われる。

織物は大きく分けて、オヒョウをはじめハルニレ、シナノキ等の樹皮から作られる「アツシ」と、サハリンで多く製作される主にイラクサの繊維から作った「レタルペ」がある。アツシはその丈夫さ、防寒・防水性などによって、特に船乗りや漁業関係者の間で愛用されており、江戸時代の交易品として必ず挙げられるものであった。ただ、その美しさや製法の珍しさについて言及しているものは少なくないものの、幕府の「定直段」の一覧などを見るに、キナ箆、しな縄、漁網、などの梱包資材や生産用具と同列の扱いを受け、工芸品というよりも梱包資材や日常的な実用品として、大量に生産され取り引きされたようである。

松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』によれば、「烈婦モレワシといへるは當年廿八歳、西場所なるテシホの川上なるナイプトといへる處の者にて、…中略…。十日路餘の處を唯一人にて小舟に棹さし、毎々紡績致し置しアツシ等を持下り、運上屋へ其アツシを差出し薬を乞ひ、是を持歸りて服さしめ、…後略。」とあるが、「彫工」に対してはその人間性や作られたものへの主観的な記述が多かった武四郎だけに、モレワシのアツシ織りの記述からは必需品を得るための手段という以上の思い入れは感じ取れないのである。

ただ、海水産物の収穫量の多少など、地域によって他の生業活動の割合とも関わりながら、技術や素材の良さから名産地とされる場所があったこともまた事実である。これらは『加賀家文書』の「第一綴 北辺要話」に、萱領シヤリ（西は網走に接し、東は根室領メナシに至り、南はクスリの山と堺す）は、「此地海産少しと云ども男夷は彫刻の細工に精妙なり。女夷またアツシを織、蝦夷全州萱場所の如き良品を産するなし。是等の産は毎ことごとく運上屋に出して交易す。土人の生産大方モンベツ蘆川領に同じ。」で、寒所領メナシ（南は新領子モロに境し、西南クスリの公領に接し、西北萱領と境す）は、「亦アツシに乏く土人多く着服するものハ、萱シヤリに産するもの也。此地機織の術をしらざるに（できず）あらずといへども、漁事に暇なき故ならずと云。」とあることでも、うらづけられる。もちろんこれは、漁場労働との関係抜きには語れない。

以上は北海道の事例であったが、サハリンでは、イラクサ製布「レタルペ」のほうが柔らかであることから、アツシよりも上品なものとして、重宝がられていたようである。『唐太話』〔天保13（1842）年ころ成立〕には、「此地の産にイタラペイといひて大地ふとしの布やうなる織ものあり。それに本邦より渡りたる紺、浅黄などのもめんめんの切々を、も緬めんいとにて色々々々なるやうに縫付て着服とす。蝦夷のアツシよりはせめてはよろしきもの也。本邦より行たる船頭、船子などの折々は持來て着るものあり。」と記されている。

一方、千島では布としての大きな織物はあまり作られていなかったとされている。津軽藩士山崎半蔵の『東蝦夷地紀行』文化三（1806）年〔阿部 1985：pp.81〕によれば、エ

トロフ、シャナのこととして「(前文略ス)然るに、当島の夷人其名さへ不_レ知。外地夷の織しアツシを彼等に見せしに、『是は如何なる処にて拵る物ぞ』と問しに『是は他方の女夷共の織たる』と申聞かせけれ共、彼の女夷共是は一へと乍_レ云『我等小出籠組させ皆々出来ぬ也。是を組たる女の子共も、又神の類なり』と大に感じける。」とあり、荒井保恵の『東行漫筆』〔文化六(1809)年ころの見聞]でも、^マと^ト路^ロ婦^フ島ヲイト番人甚之丞の話として、「…一 夷人細工もの出来ず。女ノ子縫物不益作なり。一 テンキ タン子ムイ、ナイホの夷人至^ニ上手なり。ムリツといふ草を好く晒して作る。」とある。アツシを知らないか、あるいは不得手であるが、テンキ(籠)は作る。このことは、鳥居龍藏などによる後の民族誌からも証明されていた。しかし、山田聯の『北裔備攷』〔文化八(1811)年の成立) [1991: pp.415]には注目すべき記述があり、「…又『エタルペ』^(ウルツフ)ユルブノ嶋々ニテ『ブランド子ツテル』^{ヌナリ}ヲ以テ布ヲ織、日本ノ木綿鉄器ト交易ス。」とのことである。ここでいう「ネットル」がイラクサ(nettle)を指していると考えれば、ウルツフ島で交易品となるほどの「レタルペ」が織られていたことになる。この二つの記録はほぼ同時期であるので、「千島アイヌ文化圏」と線引きがなされているウルツフあたりでも、例外として技術の断続的な分布があることや、交易のもたらす文化変容について考える興味深い材料といえる。

千島でもっとも名産品となっていたのは、テンキ草(和名ハマニンニク; *Elymus mollis*)で編んだ籠細工「テンキ」である。古くは1789年の菅江真澄の『えみしのさえき』から、先述の荒井保恵『東行漫筆』(1809年)、窪田子蔵『協和私役』(1856年)、明治をとおして人びとの目をひく物であった。菅江真澄は、寛政元(1789)年4月の日記に「過つる、やよひのはじめにありつらんかし、遠つ蝦夷人のつともてわたりたりし、理氏武者(りてむぎ)てふ、かだまやうのものを贈せ給ふにそへて、…」と記しているが〔菅江 1789〕、また訳本の注にも「…真澄の随筆『しのはぐさ』に、むろちぐさ(この草は^マ茅にて葉厚く、色はうす綠色)の夏刈りをもって、奥蝦夷のメノコ(婦女)があや模様を入れて編んだ籠。アキノはこれをリテンギといい、松前の和人はえぞこだすという。このこだすのそそけた毛をとって、産婦に飲ますと、安産するという…」とあり〔内田 1966〕、「むろち」はハマニンニクのことと別記があるように、これはテンキのことについて語ったものである。すでに18世紀から、千島のテンキは松前にもたらされていたわけである。

ここで、工芸品の製作に携わっていた人びとについて、ある事例に触れておきたい。先にも挙げた松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』にはセシリバという身体に障害を持つ人物のことが書かれている。「モンベツ番屋元なる平土人セシリバといへるは、…中略…今年三十歳、産れながらの不具にして右の手一本痺痿て不_レ動、ぶらりとして下りしまゝ少しも正氣なし。兩足少しも立ず、只兩便に行にもいざり一へて行けるが、幼き時よりして其不

具を深くも憂ひて、諸々の仕事をなし覺え、左の手にて座しながら櫂を搔き、一人にて洋中に出て漁りし、釣を垂れ、銚槍を遣ふに妙を得、其得る處他人に倍し、毎に細工を好みて手拭懸又糸まき等左りの手に持ち、小刀を左りの膝の間に挟み居て其を削り、また匙等を作る時は足の下に小刀を敷居て其にて削り、また匙を足にて踏まえ居て左りの手にて削りなどして作るに、纔其代料を番屋より請取、其もて父母を養ひ…後略。」以下、不具への憐れみから毎年手当てを貰っていたので、それを恩に感じて糸巻きと匙を献上したが、奉行のところに行く前に中間搾取され、そのことを知っても気に掛けなかった、という内容が続く。イヌイトの事例では、工芸品の製作を主業とするのは、狩猟のできない老人やハンディキャップを持つ人だと考えられたことがあった〔齋藤 1993〕が、アイヌについてはどうであったのだろうか。

明治時代

明治になり、工芸品の種類に関しては、幕末と大きな変化は認められないが、開拓使の記録などが増えたことにより、年間の総生産量、価格などの様相が多面的にとらえられるようになった。産業・経済関係の報告書類などに記録されている可能性から、アイヌ関係史料として発掘されていない文献がまだあるだろうと思われる。また、明治時代に収集された工芸品類は実物や写真でも見ることができ、研究上の大きな手掛かりとなっている。

工芸品製作の目的のうちでも、江戸時代と違うのは、博覧会への出品がある。明治6年のウィーン万国博覧会のために作られたアイヌの工芸品類は、現在東京国立博物館に収蔵されているが、それより前、明治4年には大学南校物産会が、明治5年には湯島聖堂博覧会が開かれており、その資料も同館の収蔵品となっている〔東京国立博物館 1992〕。

これらがどの様な経緯で収集されたかを知る一つの例として、『明治八、九年開拓使公文録』〔阿部 1985 : pp.32〕を以下にあげる。

・細工巧者ノ土人雇入ニ付伺

上局

物産局

会計局

各国並各府県等ヨリ博物出品ノ義申越候ニ付テハ、於_二当地_一土人細工物ノ類新調仕度候間、土人三名近郡ノ内ヨリ巧者ナル人物相撰、雇入候様仕度、此段相伺候也。

八年十二月二日

・細工上手ノ者人選ニ付届書

当郡土人ノ内、彫物細工上手ノ者人撰ノ義ニ付、御達罷成候処、* 平賀村土人^{イモンバ}以毛無波^{ウク}卯久^{44歳}、兼テ右職業ノ者ニ御座候ニ付、同人呼取申談候処、昨年十月中家作焼失今ニ借居仕

居、本庁へ罷出御細工御用相勤兼候段申出、何様ノ御用ニテモ当局掛リニテ、御細工被_レ仰付_レ 候様申出候ニ付、宜敷御取計ヒ被_レ 成下_レ 候様仕度、此段御届仕候也。

九年二月廿三日

沙流郡副戸長

新野 蔵治

静内御出張所御中

*平賀は現在の門別町にある地名

上記の公文書のように、アイヌ工芸品の収集には、官庁が一役買っていた。明治九年に漁場持廃止が開拓庁より通達されると、これによって職を失うアイヌが増え、生活に窮する者が多くなったが、後幕府直轄時代(1855~1868)、アイヌの労働保護の立場から定直段が励行されていたように、官側の政策として、例えば根室支庁ではアイヌの手工芸品や毛皮類を買い上げ独立の生計にまで育成しようとした。この頃までは、工芸品に対する官の介入は小さくなかったようである。しかし、漁業が再開されると、工芸品の製作をもともと副業としか考えていなかったアイヌの人びとは、これに身を入れる者が少なくなったという〔網走市史：pp.1094-1098〕。官の授産策は思い通りに運ばなかったが、アイヌの人びとの生業に関する意識が読み取れて、興味深い。

この時代、工芸品の製作はまだ職業としては確立しておらず、副業にはなっていたはずであるが、そういった記述は、管見の限り認められない。『明治十二年長官伺録 天号副本』〔阿部 1985〕から抜粋すると

・農業博覧会出陳録^{まき}？

アツシ

製造機械 箒、綾木…中略…

製造人物

産出総計 明治十三年凡千枚 此金二千五百円

厚子脚絆(ハンバキ)

一ヶ年一人分凡百五拾足 代価高総計 十三年産出代価凡七拾五円

とあるが、これが北海道全体のことであるのか、この時代の他の物価と比較して、どう考えられるか調査できなかったので、今後の課題にしておきたい。

また、1881(明治14)年には当時の天皇が北海道を旅行し、白老では熊送り儀礼やアイヌの舞踊を視察した。踊りに参加したのは、男性28人、女性22人であった。熊送りでは、白老と有珠の飼い熊2頭を用意したが、形だけで実際は殺さずに連れ帰ったという〔満岡 1924〕。その後、1911(明治44)年には皇太子(後の大正天皇)も視察を行い、大正時代以降、白老が観光地となる引き金となったことも重要である。

明治8(1875)年にロシアとの「樺太・千島交換条約」にもとづき、明治17(1884)年にシュムシュ、パラムシル、ラショワ三島に住んでいた北千島アイヌの人びとはシコタン(色丹)島へ移住させられた。鳥居龍藏は、この後明治32(1899)に千島調査に赴いたわけだが、北海道廳參事官高岡直吉の復命書である『北千島調査報文』[1975年復刻p.145]は、鳥居の行った翌年33年の調査記録である。このなかでアイヌの調査を担当した河野常吉は「色丹土人ニ関スル調査及意見」として「土人ノ業務 農業ハ馬鈴薯蘿蔔ノ如キ多少耕作セリ然レトモ僅少ニシテ自家ノ食料トナスニ過キス業暇ニハ男子ハ茶盆菓子盆類ヲ製作シ婦女ハ『テンキ』ト称スル草ヲ編ミテ煙草入、籠等ヲ製作シ之ヲ売りテ已等ノ嗜好スルトコロノ物品ヲ購求スルト云フ」と記述している。鳥居の収集したテンキがいかなる目的で作られたものかはわからないが、当時、商品としてテンキが作られていたことは明らかである。そうして人口が激減するにあたり、テンキも次第に消滅し、現在ではその製法すら伝えられていないような状態である。

なお、日本人研究者によって調査された欧米にあるアイヌ関係資料の大部分は、1890年代以降のものであるから、その工芸品の中には初めから売ることを目的に作られたものが含まれている可能性も充分にある。

大正時代

この時代の大きな変化は、公的な買い上げと販売が明治時代よりさらに発達したことだといえるが、それは限られた地域のことであり、現在いわゆる「アイヌ文化の里」などとして観光地となっている場所とかなり一致している。多量に工芸品が製作されるようになった大きな契機は、旭川區(現在は市)の施策である。大正11(1922)年の北海道廳の『舊土人に關する調査』[1980]から、関係部分を抜粋する。

「舊土人の産業に關し特殊の施設を爲して之を保護しつゝあるは、旭川區及函館支廳管内八雲外四箇村に過ぎず左に其の概要を記すべし。

旭川區

- 一 模範農場の設立 …後略
- 二 農耕實習地の特設 …後略
- 三 農産品評會開催 …後略
- 四 手工の奨励 舊土人中男子に在りては獨特の彫刻を施せる盆、箸、手拭掛、匙、洋杖、羽織掛等の木工品、女子に在りては刺繡を施せる卓子掛、座蒲團表、信玄袋及蒲製菓産等の手工品の製作を奨励し大正四年來區に於て成品の買上げをなし、或は材料を補給する等努めて産額の増加を圖りつゝあり
- 五 農耕物の共同販賣 …後略
- 六 養蠶奨励 …後略
- 七 農事講和會開催 …後略

八 種苗の配付 …」

工芸品政策の奨励は、昭和にはいつてからも続き、現在道内の各地で活躍する彫刻家にも旭川の出身者は少なくない。

それらと関連して、同書には副業として、主業閑散の時期に他に雇われたり冬季間の樵夫などとして出稼ぎをする以外のものについて、道内の支廳ごとに全戸数698戸と全収入8,151円の内訳一覧が掲載されている。旭川区では彫刻刺繍をしていたのが25戸で収入が500円で、その他の地域にはなかった。ちなみに全道で最も戸数が多かったのは、481戸の養鶏であるが、7戸を除いては全て浦河支庁で、その収入は1,443円にすぎず、むしろ狩猟は65戸で各支庁にほぼ数戸ずつは見られ、総収入は4,785円と高額だった（うち旭川区は39戸、3,500円）。非常に少ない事例ではあるが、数字の上からも、旭川ではアイヌの伝統的技術を活かした副業が他地域に比して際立っていた。

このように、大正時代の記録からはアイヌ文化の継承において地域差が大きくなり、現在の観光地の形成が始まったのは、ほぼこの時代からということができよう。昭和16年に金田一京助が英語で書いた“AINU LIFE AND LEGENDS”のなかの「外国人のためのアイヌ村への案内」という章では、白老と近文（旭川）の二つを観光客を受け入れる村として紹介している。その内容の詳細は次の機会に述べたいと思うが、現在も博物館の展示とチセ（家）などを見ることができる観光地として知られるもう一つの地域として、白老をあげることができる。

白老では、明治年間における皇族の視察以来、多くの研究者や視察団が訪れるようになった。当時は「来訪者が増えてくると、コタンにある伝統家屋は一般の人々にも解放し、そこでエカシ（古老）が昔さながらの服装をしてアイヌ伝統文化の解説を行い、婦人たちがコタンに伝わる舞踊を舞い、うたを唄って聞かせた。今現在、当財団（筆者注：当時白老民族文化伝承保存財団）がポロトコタンで行っているような営業活動の原形が、大正当時すでに芽生えていたのである」という状況であった〔アイヌ民族博物館 1988〕。これは、交通の便によるところも大きく、国道とJRの沿線で、現在も空の玄関口新千歳空港と海からは苫小牧、室蘭から近いという好条件にある。

しかし、一方で次のような記述もある。大正六年に旭川区上川第五尋常小学校長赤松則文が記した『室蘭支庁管内旧土人学事状況視察復命書』によれば、「土人伝来ノ細工物ヲナセルハ殆ド各部落共其跡ヲ絶チ漸ク白老ニテ一戸之ヲナセルモ自家ニテ視察者ノ需求ニ供スルニ過ギズ。只アツシ織ハ各部落共間々之ヲ織出スモ自用ニ供スルノミ。」冬季間の業務についても記述があるが、工芸品製作については触れていない。同じ頃、『アイヌ芸術』の著者で収集家としても有名な杉山寿栄男は、白老のことを次のように書いている。「この北海道に初めての渡島は大正八年王子製紙に依頼された繪の仕事で出張の折、苫小牧に近い白老部落を訪れたのが最初であった。當時は現今の如くアイヌの家は今のやうな見世物的でなく、部落はひっそり閑として屋内をのぞいても最早土俗品らしいものもなく、

荒れはてた畑に疲犬が餌を求めて居る寂しい風情で、驛近くの賣店に新しいアイヌ細工のお土産の僅かが並べられてあるに過ぎなかった。」[杉山 1941]。

また、大正時代に入ってから、博覧会などにおいて、見世物的な興行が行われていた。大正2年4月1日から大阪市で開かれた明治記念拓殖博覧会について、河野常吉が収集したアイヌ関係新聞記事資料のなかに同年3月30日の小樽新聞で、「拓博の土人館 …アイヌの住家には三人のアイヌが一生懸命に働いて居た。細工物をして販売すると云ふ。…」[河野 1984]とあり、阿部正己が蒐集した小樽新聞の同年4月10日の記事では、「拓博行き樺太土人 …其人数はアイヌ四人、オロツコ、ギリヤーク各二人、…中略…又ハイバツテイはアイヌとして彫刻其他の手芸頗る巧みなるが、…」とある[阿部 1985]。二つの記事には人数に若干のくい違いがあるが、これを合わせると、サハリンアイヌのハイバツテイほかを作った彫刻などを売っていたということがわかる。また、大正七年の小樽新聞にも「博覧会と旧土人」として、現在もアイヌ文化継承に力を注いでいる平取町について「教育衛生拓殖館の教育出品の中に…其下の陳列棚の内には日高国沙流郡平取尋常小学校の出品に係る厚司織の衣服と脚絆の実物模型、厚司織の製作の順序及沙流川の景、厚司織の刺繍二枚の写真がある。…」との記事が掲載された[阿部 1985]。この模型資料は、現在「北海道拓殖記念館展示資料」として北海道開拓記念館に収蔵されている。

北海道内に特殊な地域が現れる一方で、サハリンや千島には北海道とほぼ同じように役所の力が及び、アイヌに対する管理が強くなるとともに、人口が減り、その文化も次第に薄れていった。大正元年9月23日付の北海タイムス紙には「色丹土人の近況」として、次のような記事が書かれた。「色丹土人の近況を聞くに、現在52名の部落は基督教会の指導を受けて比較的善良に発達し、能く奨励に服して副業に従事なし…中略…。又作成中の海産獣其他獲得品を当支庁が保管し、公買に附せし分の種類及価格を挙げれば… 魚粕 494円52銭、布海苔 12円29銭、草細工物 7円19銭、狐三毛赤皮各一枚宛 35円、鷹の羽 3円60銭」[阿部 1985]。ここでは、副業という言葉が明記されている。工芸品といえるものは草細工物だけで、これはテンキを指すと思われるが、矢羽用の鷹の羽のほぼ2倍で、狐皮の5分の一の値段段である。ただし、草細工物と狐皮は一個(枚)あたりの価格であろうが、その他については単位が不明である。

大正時代に起こったもう一つの大きな出来事は、アイヌの工芸品として最も有名になった木彫りの熊の製作が盛んになったことである。このことについては旭川市史に詳しいので、以下に抜粋すると「アイヌの民芸品といえば、今日では熊の彫刻が代表的で、近文コタンでも早くより作ってはいたが、よく『わに熊』とか『ぶた熊』『鼠熊』などと悪評を受けていたようにほとんど市販にならない拙いものであった。ところが大正十二、三年のころ、八雲の徳川義親がスイスより土産として熊の彫刻を持ち帰り、これを見本として自農場の健全な家庭副業としてその製作を奨励したところが、初めて良品が出るようになり生産をあげる。その製作品が近文コタンに入って刺激され、市でも大いに奨励、市でいく

らでも買上げることとする。」[旭川市 1959] という経過があった。その「初めての良品」については、八雲町郷土資料館で発行した『八雲の木彫熊』に詳しく、実物も同館に展示されているが、同書には「アイヌ」が彫っていたとは明言していない。旭川に話を戻すと、市の買上げに喜んだアイヌの人びとは、とにかくこしらえればいいと、売り物にならないようなものを「ごそっと」持ち込んだため、対応に苦慮した市が大正の末期から技術やデザインの講習会を開いた。「もともと彫刻のうまい部落民は、それに都会に近い地の利を得て、技術はめきめき上達し、ひとり熊ばかりでなく、はし・茶さじ・衣紋かけなどの類までその声価を高める」[旭川市 1959]。この熊の木彫りに代表される「洗練された」工芸品は、昭和に入ってから観光ブームで大きな役割を果たすことになる。

ただ筆者は、それまで作られていた「わに熊」の方にも注目したい。北海道アイヌの文化には、動物の彫像として幣冠や捧酒籠のような儀礼具に付けられたものしか知られていなかった。近年まで「山の神(キムン・カムイ)である熊を彫るとは何事だ」と怒る長老がいたとも言う[杉村 1979]。サハリン・アイヌの熊の木偶「イノカ」や近隣のウイльтаなどの民族が作る木偶と、北海道アイヌの儀礼具に彫られた小さな熊像等を見ると、和人が「わに熊」「ぶた熊」と表現したのは、これらのようなものであったと想像できる。アイヌの精神文化に表された伝統的な熊「像」は、洋風のデザインに対する和人の嗜好によって、大正の末期に姿を消したという見方もできるのだ。

まとめと課題

異文化との接触により先住民族の物質文化が変容するなかで、特に江戸時代を中心に大正時代までさまざまな記録をとおして「観光芸術 (Tourist Arts)」の成立過程を概観してきた。和人とアイヌ工芸品のかかわりの変遷から、工芸品は各時代の政治経済状況と和人のアイヌに対する関心を反映していたことがわかった。

各時代をまとめていくなれば、江戸時代はアイヌと和人と接触期であり、民族芸術発見の時代であった。大量に工芸品が作られるようになったのは、幕府の圧力によってアイヌが交易手段を失ったために、それが和産物入手する手段の一つとなったからである。このことは、交易品の品目などによく表れている。ただし、アイヌ工芸は珍奇品というよりも美的な実用品としてとらえられていたと考えられ、江戸時代という時代背景を考えるとまさに和人の目には「粹」なものとして映っていたようである。

明治時代には、漁場あるいは農業の閑散期におけるアイヌに対する保護・授産策として工芸品製作が奨励された。また、欧米文明の影響を受けるなかで、博覧会が多く開催され、新聞などで広くアイヌ文化の「特異性」が取り上げられた。「同化対策」としてアイヌ民族独自の風俗習慣を禁止したため、多くの物質文化が失われていく一方で、工芸品だけは特別な扱いを受けていた。

大正時代には、旭川市など、地域によって工芸品の公的な買い上げと販売が行われるようになり、戦後の観光ブームにつながる品物も作られるようになる。そして、いわゆるアイヌ民族文化を全面に押し出した「観光地」の萌芽が見られるようになる。

このように作り手の意識と受けとる側の意識の上から、「他人のため」の「商品化」した工芸品という点では、江戸時代の工芸品も原初的な「観光芸術」ということができる。そして、本来の「観光」という舞台設定のなかでの工芸品は、大正時代くらいから始まったといえるのではないだろうか。

文様の彫刻や刺繍は非常に精神的なものであり、作った物を他人に与えるということは考えられないため、アイヌの作った細工物は献上されたのではなく和人による収奪だとの批判もある〔山川 1980〕。早くから江戸期の細工物に注目し、それに関する記述を集めて論じた山川の視点は評価したい。しかし、自らの技能が、欲しいものつまり和産物またはお金を手に入れる手段になるとしたら、献上品や工芸品製作に関する奨励など和人からの圧力があつたとはいえ、必ずしもしぶしぶ作らされていただけではない側面もあつたのではないか。

和人から名工と呼ばれる人物がいたり、名産地とされる場所があることは、和人がアイヌ工芸品の中に「芸術性」を見ていたことをうかがわせ、作る側、特に木彫品を作るアイヌ男性の側にも（「職人氣質」というと語弊があるかもしれないが）民族としての誇りが読み取れる。その一方で、女性の作るものにはそれがあまり見られない。この点についても指摘しておきたい。本来、アイヌ社会の中では性別によるそれぞれの仕事はあつても職能というものは無かつたであろうが、江戸時代からは雇われて彫り物を専門とする者が現れるなどの変化も生じた。

近年は、太田〔1993〕や葛野〔1990〕など観光をとおして民族文化とアイデンティティの関係の研究も発表され、そのなかでは北方地域の事例も取り上げられており、非常に示唆に富むものである。現代社会の調査と違い、民族誌的記録からアイデンティティに関して研究することは困難かもしれないが、観光人類学的視点をもって歴史資料を検討することは、この問題について少なからずヒントを与えてくれるだろう。

また、日本国内に所蔵される大半のアイヌ資料は、昭和年代に入ってから集められたものでデータも不十分なため、近年では、欧米にある明治時代に収集されたアイヌ資料についての研究が行われてきている〔小谷 1993〕。江戸期のこういった土産物の類いをアイヌ民族資料と認める観点に立てば（筆者はそう考えるが）、それらは現在博物館をはじめとする機関に収められている大部分の資料の収集・作成年代をはるかに遡る資料ということができるわけである。それらを捜し出すのはかなり困難なことではあるが、旧藩士の旧家など各地に所在する可能性はある。現在残されている資料と、より古い江戸時代の文献にみられるものとは、文様や形態などがどう違うのかを調べることができれば、アイヌ文様などにかかわる編年を作成するのに、貢献するはずである。

本稿では、アイヌ文化における初期の観光的要素を拾い出し、検討してきた。次の機会には、昭和から現在までの変遷を中心にして、アイヌ文化を観光人類学的視点でとらえ直していきたいと思う。

謝 辞

本稿を書くにあたり、多くの研究者や博物館の特別展から示唆を受けた。東京国立博物館の佐々木利和氏、北海道開拓記念館の出利葉浩司氏からは、さまざまな情報や考え方をご教示いただいた。また、北海道民族学会平成5年度第1回研究会にて、北海道東海大学（当時）の太田好信氏をはじめ、参加者からご指摘やアドバイスをいただいた。記して感謝申し上げたい。

文 献

アイヌ民族博物館

1988 『シラオイコタン 木下清蔵遺作写真集』 財団法人白老民族文化伝承保存財団

1992 『田中忠三郎コレクション目録』 アイヌ民族博物館

赤松則文

1917 「室蘭支庁管内旧土人学事状況視察復命書」(1981『アイヌ史資料集第二巻』北海道出版企画センター)

旭川市史編集委員会

1959 『旭川市史第一巻』 旭川市役所

網走市史編纂委員会

1958 『網走市史 上巻』 網走市

1971 『網走市史 下巻』 網走市

阿部正己編

1985 「終北録」 高津泰 1808年『アイヌ史資料集第二期第六巻 アイヌ叢誌(三)』北海道出版企画センター：pp.73

1985 「蝦夷みやげ」 幕吏某 享和元年『アイヌ史資料集第二期第六巻 アイヌ叢誌(三)』北海道出版企画センター：pp.79-80

1985 「東蝦夷地紀行」 津軽藩士山崎半蔵 文化3年『アイヌ史資料集第二期第六巻 アイヌ叢誌(三)』北海道出版企画センター：pp.81-82

1985 「明治八、九年開拓使公文録」『アイヌ史資料集第二期第六巻 アイヌ叢誌(四)』北海道出版企画センター：pp.32-33

1985 「明治十二年長官伺録 天号副本」『アイヌ史資料集第二期第六巻 アイヌ叢誌(四)』北海道出版企画センター：pp.88-93

- 1985 「阿部正己蒐集アイヌ関係新聞記事」『アイヌ史資料集第二期第六巻』北海道出版企画センター
- 荒井保恵
1807 「東行漫筆」(1991 秋葉実編 『北方史資料集成 第一巻』 所収)
- 石森修三
1989 「旅から旅行へ」守屋毅編『現代日本文化における伝統と変容 6 日本人と遊び』東京：ドメス出版
1991 「観光芸術の成立と展開」石森修三編『民族音楽叢書 6 観光と音楽』東京：東京書籍
1992 「新しい観光学の提唱」『中央公論』7月号 中央公論社
- 内田武志
1966 「えみしのさへき」(内田武志・宮本常一編訳 『菅江真澄遊覧記2』 東洋文庫 68所収 平凡社)
- 太田好信
1993 「文化の客体化 -観光をととした文化とアイデンティティの創造-」『民族学研究』57-4
- 大塚和義編
1993 『アイヌモシリ 民族文様から見たアイヌの世界』国立民族学博物館
- 海保嶺夫
1985 「蝦夷地の交易」『目の眼』No.104 里文出版
- 加賀伝蔵
「加賀家文書」(1989『北方史史料集成』第二巻 北海道出版企画センター)
- 木村信六
「アイヌの細工人」(木村信六・和田文治郎・林欽吾 1984『北方歴史文化叢書 千島・樺太の文化誌』北海道出版企画センター)
- 金田一京助・杉山寿栄男
1942 『アイヌ芸術 木工編』北海道出版企画センター(1993年新装版)
- KINDAICHI, Kyosuke
1941 “AINU LIFE AND LEGENDS” (1980『アイヌ史資料集第七巻』北海道出版企画センター)
- 串原正峯
1792 『夷諺俗話』(1969『日本庶民生活史料集成 第四巻』三一書房)
- 窪田子蔵
1856 「協和私役」(1969『日本庶民生活史料集成 第四巻』三一書房)

河野常吉編

- 1984 「拓博の土人館」『アイヌ史資料集第二期第七巻 アイヌ関係新聞記事』北海道出版企画センター：pp.139-141
1984 「白井新太郎氏の談」『アイヌ史資料集第二期第七巻 アイヌ聞取書』北海道出版企画センター：pp.221-223

国立民族学博物館

- 1985 『国立民族学博物館十年史資料集成』 財団法人千里文化財団

小谷凱宣編

- 1993 『在米アイヌ関係資料の民族学的研究』 名古屋大学教養部

兒山紀成

- 1808 「蝦夷日記」(1969『日本庶民生活資料集成 第四巻』三一書房)

齋藤玲子

- 1993 「北方諸民族における現代の民族芸術研究の課題 -イヌイト・アートの商品化の歴史を中心に-」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第2号

ジョン・バチェラー

- 1893 『日本北海道案内記 譯本』 長岡照止訳 (1980『アイヌ史資料集第七巻』北海道出版企画センター所収)

菅江真澄

- 1789 「蝦夷宣辭辯」(1971 内田武志・宮本常一編 『菅江真澄全集第二巻』 未来社所収)

杉村京子・大塚一美

- 1979 「近文メノコ物語」『あるくみるきく』148 日本観光文化研究所(近畿日本ツーリスト株式会社)

杉山寿栄男

- 1941 「アイヌの寶物」『工藝』106 アイヌ号 日本民藝協會

高倉新一郎

- 1942 『アイヌ政策史』 日本評論社

東京国立博物館編

- 1992 『東京国立博物館図版目録 アイヌ資料篇』 東京国立博物館
1993 『アイヌの工芸』 東京国立博物館

成田得平・花崎皋平他編

- 1985 『近代化の中のアイヌ差別の構造』 明石書店

北海道開拓記念館

- 1990 『第38回特別展・北海道開拓記念館所蔵北方民族資料展』 北海道開拓記念館

北海道廳

1901 『北千島調査報文』(1975年復刻 北海道出版企画センター)

北海道庁

1922 「舊土人に關する調査」(1980『アイヌ史資料集第一卷』北海道出版企画センター)

1926 「北海道舊土人概況」(1980『アイヌ史資料集第一卷』北海道出版企画センター)

平秩東作

1783 「東遊記」(1969『日本庶民生活史料集成第四卷』三一書房)

松浦武四郎

1858 「近世蝦夷人物誌」(1977 吉田武三編『松浦武四郎紀行集下』富山房)

松宮觀山

1710 「蝦夷談筆記」(1969 谷川健一他編『日本庶民生活史料集成 第四卷』三一書房)

マリアン W. スミス編

1973 『部族社会の芸術家』 木村重信・岡村和子訳 鹿島出版会

満岡伸一

1924 『アイヌの足跡』〔増補改訂〕 財団法人白老民族文化伝承保存財団
〔1987〕

三保喜佐衛門談・布施虎之助註

1842 『唐太話』(1969『日本庶民生活資料集成第四卷』三一書房)

武藤勘蔵

1799 「蝦夷日記」(1969『日本庶民生活資料集成第四卷』三一書房)

村尾元長

1892 『あいぬ風俗略志』(1980『アイヌ史資料集第四卷』北海道出版企画センター)

八雲町郷土資料館

1979 『木彫熊と八雲農民美術研究会』(第1回特別展カタログ)

八雲町郷土資料館・八雲町教育委員会

1985 『八雲の木彫熊』

山川 力

1980 『アイヌ民族文化史への試論』 未来社

山田 聯

1811 『北裔備攷』(1991『北方史史料集成第一卷』北海道出版企画センター)